

い。南地と云へばお青樓のある所。お青樓と云えば何をやる處と云ふ事は解つて在ますわい。貴方が何ふ云ふか知らんと思ふて、知つて呆けてたら、よふヌケ〜とそれ丈けの事を私いの前でハツキリ云ひなはつた。幸助どん私いはなア。先刻も云ふた通り四十二だつせ。自分に甲斐性が無いので未だにお青樓の段梯子は何方向いて登る物やら知りまへんワ。藝者と云ふしやは夏着る物やら冬着る物やら、舞妓と云ふ粉は一升どの位する物やら、太鼓持といふ餅は焼いたら宜えのか煮いたら美味いのか、まだ一切れも喰べた事が在まへんのや。其私いを目の前に置いて、よふ面厚かましい夫れが云えまんなア」

「相濟まん事でおます。以後は慎しみます。今日の處は誠に私のデケ。デケ。デケどこない……」

「フ、ン。物も碌態云えぬなんて恥かしいと思ひなはれ。他の若い者と違ふて、貴方等に小言云ふてたら御互に映われる依て、もう何も云やへんけど、ちいと氣イ附けとくなはれや。……サア彼方へ往て用事をして來なはれ。……彼方へ往きなはらんかいナ。……コレ。私いが往きなはれと云ふた時に立たなんだら、立つ機が無い様になりまつせ。往きなはれと云ふのに……」

「ヘエ。……往き度ふおますねが……痺れが切れました……」

「まア呆れ果てた人やなア……イヤもう。貴方がたに物は言ひまへんワ。子供ツ。俺しの履物出そツ是れから一通り御得意廻りをして來ます。貴方等に任しといたら何んな豪い無茶がしたアるや解らへ

ん。若し親旦那がお訊ねなはつたら、日暮れまでには歸りますと云ふときなはれ。確かり番を頼みます」

「イヤア。毛虫が出て往きよる。」

「何。毛虫が何ふやて……」

「イエ段々暖ふ成て來たさかい、ポツ〜毛虫が出る云ふてまんね。……お早ふお歸り。」

「お早ふお歸り」

「お早ふお歸り」

「お早ふお歸り……(ペロツ)」

「定吉、貴様今何をしたんぢや」

「何も仕やしまへん」

「啞吐け。背ろから舌出したやろ。馬鹿め。背ろに眼は無ふても、チャンと前の戸に寫つたアる哩」
「ワア……。いえ番頭はん。貴方に出したんと違ひまんね舌が何時でも口の中でぼつかりオネ〜してよる、可愛相なさかい一遍世間を見せて遣りましたんや。舌出すと云ふたら彼んなんと違ひまつせ出すと云ふたら……ペロツ」

「コラツ。仕様の無い奴ばつかりや。皆んな頼みます」